HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コリャーク語の名詞化 : 動作主・被動作主名詞の意味とシンタックス
Author(s)	呉人, 恵
Citation	北方言語研究, 1, 41-62
Issue Date	2011-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45229
Type	departmental bulletin paper
File Information	nls-1-03.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 1: 41-62（北方言語ネットワーク編，北海道大学大学院文学研究科，2011）

コリャーク語の名詞化
― 動作主・被動作主名詞の意味とシンタックス ―

呉 人 惠
（富山大学）

1. はじめに

本稿は，コリャーク語[1]（チュクチ・カムチャツカ語族）における名詞化 (nominalization) 現象のうち，自動詞・他動詞語幹から派生される動作主名詞[2]・被動作主名詞，すなわち，-jo-lqəl という複合接尾辞により形成される形式（以下，JQ）を取り上げ，考察をおこなうことを目的とする。具体的には，主に次の 2 点を明らかにする。

[1] JQ は，名詞項，名詞修飾句，名詞修飾節の述部，主節の述部として用いられるが，このような文中での機能の違いにより，名詞化の度合いにも差が現われる。
[2] 最も名詞化の度合いの低いのは主節述語になる JQ であるが，このような JQ は新たに義務というモーダル[3]な意味を獲得するとともに，統語的にもより動詞的特徴を帯びる。

「定形動詞節を名詞句に変換するプロセス」(Givón 2001) である名詞化は，定形動詞と通常の名詞句の中間的な性格を有するという特異性から，変形文法においても (Chomsky 1970, Lees 1960)，言語類型論においても(Comrie 1976, Comrie and Thompson 1985, Croft 1991, Koptjevskaja-Tamm 1993)，長らく議論の対象となってきた。とりわけ，後者の立場からは，

* 本稿は，平成22~26年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究B「北東アジア危機言語の記述と類型に関するネットワーク構築」（課題番号：22320075，研究代表者：津曲敏郎［北海道大学］）により，2010年9月23日～9月27日におこなった現地調査で得られたデータに基づいて書かれたものである。調査には，コリャーク語の母語話者として，アヤトギーニナ・タチヤーナ・ニコラエヴナ(Ajatginina Tat'jana Nikolaevna) 氏 (1955年マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区ミルク・ワジャム生まれ，女性) に協力していただいた。ここに心より感謝の意を表したい。また，本稿の着想は，角田太作氏をプロジェクト代表とする国立国語研究所共同研究プロジェクト（基幹型）「形容詞節と体言締め文：名詞の文法化」における一連の議論に触発されたところが大きい。角田太作氏に記して感謝の意を表したい。

[1] 本稿の対象となるのは，コリャーク語チャウチュヴァン (cawcəvan) 方言である。チャウチュヴァン方言の音素目録は以下のとおり：/p, t, t', k, q, v, ɣ, ʔ, ʕ, c, m, n, n', ŋ, l, l', j, w, i, e, a, o, u, ə/。/t', n', l'/ はそれぞれ /t, n, l/ の口蓋化を表わす。/c/ の音価は [t͡ʃ]。

[2] 自動詞主語の場合には，非能格自動詞の主語は，意図的か否かによって動作主と経験者，非対格自動詞の主語は対象のように意味役割が細分化されるが，ここではひとまず，自動詞の主語を表わす JQ を包括的に「動作主名詞」と言っておくことにする。「主語名詞」としないのは，それでは動詞語幹から派生された名詞であるという意味が伝わりにくいためである。

[3] ここで「モーダル (modal)」とするのは，文法カテゴリーとしての「ムード (mood)」と区別するためである。すなわち，「モーダル」は「文法カテゴリーとして固有の形式を持つわけではないが，ムード的な意味を表わす」という意味である。

名詞化は定形性 (finiteness)[4]喪失の度合いにより言語間で大きく異なることが指摘され (Givón 2001)[5]，名詞化の統語論的類型論の構築が試みられてきた（たとえば，Koptjevskaja-Tamm 1993）。また，名詞化により失われる動詞のカテゴリーがどのような階層をなしているのかという観点からの研究も精緻化されてきた (Noonan 1985, Lehmann 1988, Croft 1991, Malchukov 2005)。さらに，そのような研究の中で，名詞化が動詞からの脱カテゴリー化 (decategorization) (Hopper and Thompson 1984) と名詞への再カテゴリー化 (recategorization) (Bhat 1994) の2つのプロセスを含んでいるものであることも確認されてきた (Malchukov 2005)。

本稿では，名詞化がこのように脱カテゴリー化と再カテゴリー化という 2 つのプロセスの中で，定形動詞と同じ統語特徴を部分的に保持しつつ，定形動詞では見られなかった新たな「動詞的な」意味を獲得することがあることを，JQ により示そうとするものである。

とはいえ，名詞文というよりはむしろ動詞／形容詞文と共通する統語的特徴を示す名詞述語文があることは，角田 (1996) が日本語において「体言締め文 (Noun-concluding Sentence)」（たとえば，「太郎は明日，富山に午後 3 時に着く予定だ」「太郎は近頃，とても元気な様子だ」のような文）として指摘し，その後の研究ではさらに通言語的視点からこの構文を捉えなおす試みを進めている (Tsunoda 2010)。角田 (1996), Tsunoda (2010) での考察は体言締め文の形態的・統語的特徴に焦点が当てられているが，興味深いのは，体言締め文が統語的に動詞／形容詞文と似ていることに加え，「男の子は泣かないものだ」のような義務というモーダルな意味や，「太郎は今本を読んでいるところだ」のようなアスペクチュアルな動詞的意味を表わすことがある点である。

JQ 形式は，動詞語幹に名詞化接辞 -jo-lqəl が付加されるという点で，〈動詞／形容詞連体形＋体言＋だ〉のように，動詞／形容詞の後に独立の体言がくる体言締め文とは構造的には異なる。しかし，いずれも，名詞述語文でありながら，このように動詞的な意味や統語的特徴を示すという側面では共通点がある。そこで，本稿では，上述の [1] [2] に加え，類型論的視点から次の点についても指摘したい。

[3] JQ は，日本語などにある体言締め文の文末構造に対応する形式が，統辞論的に顕現するという点で異なるが，統語的，意味的にいずれも動詞との類似点を持つという点では共通している。このことは，体言締め文の通言語的研究が，〈動詞／形容詞連体形＋体言＋だ〉という統語構造を超えて可能であることを示唆している。

---

[4] ここでいう「定形性 (finiteness)」とは，Givón (1990:853) に従い，「節が典型的他動節に類似している度合い」を意味する。そこでは，結合価やテンス・アスペクト・モダリティなどは，定形性に関わる主たる統語的特徴であると考えられている。なお，定形性に関するより詳細な議論については，Nikolaeva (2007) を参照されたい。

[5] Givón (2001) は，すべての従属節が名詞化される「究極の名詞化言語 (extreme nominalizing language)」と，あらゆる節が定形で表わされる「究極の定形言語 (extreme finite language)」という対極の 2 つのタイプを設定している。

2.　コリャーク語の名詞化現象と JQ

コリャーク語では，動詞が名詞のようにふるまうことを示すいくつかの形式が観察される。まず，次の 1) から 3) は，動詞語幹に直接，名詞の格標識と同じ接辞が付加されているタイプである。従属節の述部に現われる様々な副動詞形をはじめとして，命令形，不定形としても用いられる。

1)　従属節の述部：-k（＝場所格），-ŋ（＝与格），ɣejq-/ɣajq-..-(t)e/-(t)a（＝共同格）
　　(e.g.) ewji-k「食べる時」，ev-ə-ŋ「言うに」，ɣejq-ə-cetkejuŋ-e「考えながら」
2)　命令形：ɣe-/ɣa-..-te/-ta（＝共同格）
　　(e.g.) ɣa-tajk-ə-ŋvo-ta「いつも作りなさい」
3)　不定詞：-k（＝場所格）(Zhukova 1972:257)
　　(e.g.) ewji-k「食べること」

一方，次の 4) 5) は，名詞化接尾辞を介して，名詞項として機能する形式になったものである。4) は動作名詞，5) は自動詞の場合には主語の動作主名詞，他動詞の場合には目的語の被動作主名詞を表わすというように，能格的な派生を示す形式である。いずれも絶対格単数形で示す。

4)　動作名詞：-ɣiŋən（以下，GN 接尾辞）
　　(e.g.)　tajk-ə-ɣiŋən「製作」，kəmeŋat-ɣiŋən「出産」，jeŋa-ɣiŋən「飛行」
5)　動作主名詞・被動作主名詞：-jon (以下，JO 接尾辞), -jolqəl, -lʕən (以下，LH 接尾辞)
　　(e.g.)　jeŋa-jo-n「飛ぶ者」, təm-jon「殺した動物」
　　jeŋa-jo-lqəl「飛ぶ予定の者」，təne-jo-lqəl「縫う予定の物」
　　jəlq-ə-lʕən「寝ている者」，tejk-ə-lʕən「作った物」

これらのうち，5) の JO, JQ, LH という 3 つの形式は，いずれも従来のコリャーク語文法では，名詞の一種として扱われてきた (Zhukova 1972)。しかし，これらは，文中で名詞項になるだけでなく，名詞修飾句・節，さらには主節述部としてモーダルあるいはアスペクチュアルな意味を表わしたりするなど，むしろ単一の品詞には収まりきれない多機能性を有する点で共通している。もちろん, JO, JQ, LH の間でも, 名詞化の度合いは一様ではないし，同一形式であっても機能によって名詞化の度合いに違いが見られる可能性もある。

この 2 つの形式のうち，LH については，先行研究でもその典型的な名詞とはいえない性格を反映して,「動詞の名詞的形式」なのか「出動名詞」なのかをめぐって議論があったし，LH が保持している動詞性が，項構造，ヴォイス，テンスなどの側面からも検討されている (Zhukova 1972)。一方，JO と JQ はこれとよく似た形態的・統語的特徴を示すにもかかわらず，これまでの先行研究では限られた記述しかみられない。

ところで，JO と JQ という 2 つの形式を比べてみると，JQ のほうが明らかに名詞化の度合いが低い。JQ は JO に名詞語幹修飾タイプの接尾辞 -lqəl「～になる予定のもの」が複合してできた形式であるが，JO が格標示を自由におこなえるのに対し，JQ には後述のように

格標示に制限がある。したがって，-jo-lqəl をひとまとまりの形式として -jon とは別個に論じる根拠がある。そこで，本稿では，JQ という形式に焦点を絞り考察を進めていく。考察にあたっては，名詞項，名詞修飾句，名詞修飾節述部，主節述部のそれぞれの用法に関して，名詞化の度合いを測っていく。

ところで，Givón (2001) は，名詞化にともなう形態・統語的変更として，次の 7 点をあげている（訳は呉人による）。

(1) プロトタイプ的定形動詞節からプロトタイプ的名詞句への調整としての名詞化
   a. 動詞の主要部名詞への変化
   b. 動詞の名詞化形態法の獲得
   c. テンス・アスペクト・ムード形態法の喪失
   d. 代名詞的一致の形態法の喪失
   e. 主語 (and/or) 目的語の属格標示獲得
   f. 限定詞の付加
   g. 副詞の形容詞への転換 (Givón 2001:25)

本稿では，これを名詞性と動詞性という観点からよりシンプルに整理して，大きく次の 3 点について検討を加えていく。

① 格・数標示をどの程度受けることができるか？
② 名詞項や付加詞の取り方は定形動詞とは異なるのか？
③ テンス・アスペクト・ムードといった動詞固有のカテゴリーは認められるか？

①は名詞性が保証される格や数標示が，JQ においてはどの程度，徹底されているのかを測るものである。すなわち，名詞性という視点からの検証である。これに対して，②③は動詞の定形性という視点から検証を試みるものである。具体的には②では定形動詞同様に名詞項や付加詞成分を取りうるのか否かを検証する。そして③では動詞同様のカテゴリーを持ちえるのか否かを探る。このように，名詞性と動詞性の両面から JQ について検証するのは，先にも触れたように，名詞化が一方では通常の名詞句と，もう一方では定形動詞と連続しているためであることは言うまでもない。そして，このような考察の手順を取ったうえで，主節述部として現われた JQ において，動詞的意味や統語特徴がどのように顕現しているのかを見る。

3. 名詞と動詞の形態的・統語的特徴

本節では，本稿の主テーマに入る前に，まずは上述の 3 点を中心に典型的な名詞と動詞の形態的・統語的輪郭を概観しておきたい。

コリャーク語は，形態的に膠着的かつ複統合的な言語である。その複統合性は，多様な接頭辞，接周辞，接尾辞の使用，さらには抱合などの形態的手法に支えられている。接辞の中には，「食べる／飲む」「取りに行く」「狩る」「橇用に（トナカイを）捕まえる」といった具体的な動詞的意味を表わす語彙的接辞が見られるが，これらはコリャーク語の複統

合性を保証する手法のひとつであるといえる。また，本節で後述するように，コリャーク語は二重標示タイプで，名詞の側だけではなく動詞の側にも，主語と目的語の人称が標示される。このことは，動詞の複統合性を高める一因となっているといえよう。さらに，JQ が語でありながら，日本語の体言締め文に相当するような統語的特徴を持つこともまた，コリャーク語の複統合性と無関係ではないであろう（詳細は第 5 節にゆずる）。

3.1.　名詞

名詞の範疇には，数，格，さらに有生性がある。数には単数，双数，複数があり，これらは絶対格においてのみ区別される（たとえば，「頭」は lewət-Ø［絶単］，lewt-ə-t［絶双］，lewt-u［絶複］）。ただし，動物名詞を除く有生の名詞は，絶対格では数標示に関して他の名詞との区別はないが，斜格では単数 (-ne/-na) と複数 (-jək/-jk) が区別される（たとえば，an’a-na-ŋ「おばあさんに」－an’a-jək-ə-ŋ「おばあさんたちに」）。

格標識には次の 11 種類が認められる。すなわち，絶対格 (単数：-n~-Ø~重複~-ŋe/-ŋa，双数：-t/-ti/-te，複数：-u/-o/-w/-wwi/-wwe)，場所格 (-k/-kə)，道具格 (-e/-a/-te/-ta)，与格 (-ŋ)，方向格 (-etəŋ/-jtəŋ)，沿格 (-epəŋ/-ɣəpəŋ/-jpəŋ)，奪格 (-ŋqo)，接触格 (-jite/-jeta)，原因格 (-kjit/kjet)，様態格 (-u/-o/-nu/-no)，共同格 (ɣe-/ɣa-/ɣejq-/ɣajq-..-e/-a/-te/-ta)，随格 (ɣa-/ɣawən-..-ma) である。次の (2) は，動物名詞語幹 mil’ut「ウサギ」と有生名詞語幹 tata「お父さん（呼称）」の格変化のパラダイムを示したものである。

(2)　mil’ut「ウサギ」と tata「お父さん」の格変化のパラダイム

	mil’ut「ウサギ」	tata「お父さん」
絶対格	mil’ut-Ø（単） mil’ute-t（双） mi l’ute-w（複）	tata-Ø（単） tata-t（双） tata-w（複）
場所格	mil’ute-k	tata-na-k（単） tata-jək（複）
道具格	mil’ute-te	
与格	mel’ota-ŋ	tata-na-ŋ（単） tata-jək-ə-ŋ（複）
方向格	mel’ota-jtəŋ	tata-na-jtəŋ（単） tata-jəka-jtəŋ（複）
沿格	mel’ota-jpəŋ	tata-na-jpəŋ（単） tata-jəka-jpəŋ（複）
奪格	mel’ota-ŋqo	tata-na-ŋqo（単） tata-jəka-ŋqo（複）
原因格	mil’ute-kjit	tata-na-kjet（単） tata-jka-kjet（複）
様態格	mil’ute-nu	tata-na-no（単） tata-cɣana-no（複）
接触格	mil’ute-jite	―――
共同格 I	ɣe-mil’ute-te	―――
共同格 II	ɣejq-ə-mil’ute-te	―――
随格	ɣa-mel’ota-ma	―――

一方，名詞述語と同格には同じ形式が用いられるが，その際，名詞語幹末に主語の人称が標示される（-jɣəm［1 単］, -muji/-moje［1 双］, -muju/-mojo［1 複］, -jɣi/-jɣe［2 単］, -tuji/-toje［2 双］, -tuju/-tojo［2 複］, -Ø［3 単］, -t/-ti/-te [3 双], -u/-o/-w/-wwi/-wwe [3 複](3)。

(3) en'pici「父」名詞述語・同格形式のパラダイム

1 単主	en'pici-jɣəm	「私は父親だ」「父親の私」
1 双主	en'pici-muji	「私達 2 人は父親だ」「父親の私達 2 人」
1 複主	en'pici-muju	「私達は父親だ」「父親の私達」
2 単主	en'pici-jɣi	「貴方は父親だ」「父親の貴方」
2 双主	en'pici-tuji	「貴方達 2 人は父親だ」「父親の貴方達 2 人」
2 複主	en'pici-tuju	「貴方達は父親だ」「父親の貴方達」
3 単主	en'pic-Ø	「彼は父親だ」「父親の彼」
3 双主	en'pici-t	「彼ら 2 人は父親だ」「父親の彼ら 2 人」
3 複主	en'pici-w	「彼らは父親だ」「父親の彼ら」

上でも触れたとおり，コリャーク語は二重標示タイプを示し，主語，目的語といった文法関係の標示が名詞，動詞のいずれの側でもおこなわれる。格標示は能格タイプを示す。ただし，次の (4a) ~ (4d) に見るように，能格専用の標識をもつのは人称代名詞のみで，その他の名詞では有生性の階層に応じて，場所格あるいは道具格が能格標示に代用される。また，場所格，道具格のいずれをも取ることのできる名詞は，場所格の場合には定，道具格の場合には不定と区別される（コリャーク語の能格標示に見られる名詞句階層性について，詳しくは呉人 [2002] を見られたい）。次の (4a) は人称代名詞，(4b) は場所格を取る固有名詞，(4c) は定か不定により場所格も道具格も取る人間名詞，(4d) は道具格を取る動物名詞の例である。

(4a) mocɣənan məc-ca-jta-la-ŋ-ə-n əjava-k
we (ERG) 1PL.S-FUT-go.for-PL-FUT-E-3SG.O remote.place-LOC
va-lʕ-ə-n ineŋ-Ø.
be-NML-E-ABS.SG cargo.sleigh-ABS.SG
「私たちはずっと向こうにある貨物用橇を取りに行こう」

(4b) l'aŋe-na-k tejk-ə-ni-n-Ø
Ljage-ANM.SG-LOC(ERG) make-E-3SG.S-3SG.O-PF
icʕ-ə-n qlavol-ə-ŋ.
fur.coat-E-ABS.SG husband-E-DAT
「リャゲ（女性名）は夫に毛皮コートを縫った」

(4c) el'ʕa-ta / el'ʕa-na-k ɣəcci
woman-INSTR(ERG) woman-ANM.SG-LOC(ERG) you(ABS.SG)

ne-ku-ʕejŋew-wi.
INV-IPF-call-2SG.O
「ある女／その女がお前を呼んでいる」

(4d) ŋanko qoja-ta ku-nu-ŋ-ni-n pəʕo-n.
there reindeer-INSTR(ERG) IPF-eat-IPF-3SG.S-3SG.O mashroom-ABS.SG
「あそこでトナカイがキノコを食べている」

3.2. 動詞

動詞の文法範疇には，テンス，アスペクト，ムード，ヴォイス，人称がある。動詞の屈折形式は基本的には完了／不完了というアスペクトと未来／非未来というテンスが組み合わさってできている。ムードには，直説法，命令法，反実仮想法がある。ヴォイスには，使役，逆受動がある。自動詞では主語の，他動詞では主語と目的語の人称の標示がなされる。そのため，対応する自立の人称代名詞の出現は義務的ではない。また，語順も比較的自由である。次の (5) では，他動詞語幹 pŋəlo「尋ねる」の直説法の屈折形式（3 人称単数主語・3 人称単数目的語）をあげる。

(5) 他動詞 pŋəlo「尋ねる」の屈折形式（3 単主 3 単目，直説法）

<table>
<tr><td colspan="3">非未来</td><td rowspan="2">未来</td></tr>
<tr><td rowspan="2">完了</td><td>結果</td><td>完結</td></tr>
<tr><td>ɣa-pŋəlo-len-Ø</td><td>pəŋlo-ne-n-Ø</td><td>ja-pŋəlo-ŋ-ne-n</td></tr>
<tr><td>不完了</td><td colspan="2">ko-pŋəlo-ŋ-ne-n</td><td>ja-pŋəlo-jk-ə-ne-n</td></tr>
</table>

下の (6) は不完了非未来形の例である。

(6) ecɣi ko-pŋəlo-ŋ-ne-n.
now IPF-ask-IPF-3SG.S-3SG.O
「彼／彼女が今，（別の）彼／彼女に尋ねている／尋ねていた」

このような動詞語根のみからなる基本的な屈折形式は，さらに，例 (7) ~ (9) に見るように，完了・不完了以外の様々なアスペクト，ヴォイス，抱合などにより拡張され，文的意味に相当する複統合的な語を創出することが可能になる。

(7) ecɣi ku-tawjiŋ-ə-lqiv-ə-ŋ-Ø.
now IPF-cough-E-INH-E-IPF-3SG.S
「彼／彼女が今，咳き込み出している」

(8) ku-tawjiŋ-cij-ə-ŋəvo-ŋ-Ø.
IPF-cough-INT-E-HABIT-IPF-3SG.S
「彼／彼女がいつもひどく咳き込んでいる」

(9) ecɣi k-ena-mal-ə-n-kemetʕ-ə-jp-an-ə-ŋ-Ø.
now IPF-1SG.O-well-E-CAUS-clothes-E-put.on-CAUS-E-IPF-3SG.S
「彼／彼女が今，私にしっかり服を着させている」

4. JQ の文法的機能と名詞化の度合い

JQ 接尾辞は，能格的にふるまい，自動詞語幹につけば主語，すなわち，「～する主体となるはずの（あるいは，はずだった）もの」，他動詞につけば目的語，すなわち，「～する対象となるはずの（あるいは，はずだった）もの」の意味を表わす。Zhukova (1972) では，出動名詞のひとつとして略述されているのみであるが，JQ は実際には，名詞項，名詞修飾句・名詞修飾節の述部，主節述部という 3 つの文法機能をあわせもつ。

以下では，それぞれの機能について，① 格・数標示をどの程度，受けることができるか，② 名詞項や付加詞の取り方になんらかの変化があるのか，③ アスペクト・ムードといった動詞固有のカテゴリーは認められるのかに着目して名詞化の度合いを検証していく。

4.1. 名詞項としての JQ

以下ではまず，JQ が文中で名詞項としてふるまう際の形態的・統語的特徴について見る。前述のとおり，JQ 接尾辞は，-jo と-lqəl という 2 つの接尾辞に分析される複合接尾辞である。-jo は次の (10) のように，動詞語幹に接尾して自動詞主語あるいは他動詞目的語を表わす名詞化接尾辞である（語末の -n は名詞絶対格単数を表わす）。

(10) jeŋa-jo-n「飛ぶもの」　　təm-jo-n「殺した対象＝死体」
tajk-ə-jo-n「作る対象＝課題」　　pela-jo-n「残した対象」
joʕ-ə-jo-n「捕まえる対象＝目的」　　jənŋaw-jo-n「育てる対象＝苗」

一方，-lqəl は，名詞語幹に接尾して，「～の予定のもの，～を作るための材料，～になるべきもの」などの意味を表わす (11) （-Ø は絶対格単数）。

(11) ja-lqəl-Ø「家を建てるための材料＝柱」　　cawat-ə-lqəl-Ø「投げ輪を作る材料」
wala-lqəl-Ø「ナイフを作る材料」　　pəʕatʕo-lqəl-Ø「干し魚を作る材料」

この -lqəl に -jo が前接した JQ は名詞項として機能する際，能格的にふるまい，自動詞語幹につけば主語，すなわち，「～する主体となるはずの（はずだった）もの」(12a)，他動詞につけば目的語，すなわち，「～する対象となるはずの（はずだった）もの」(12b) の意味を表わす。

(12) a. va-jo-lqəl-Ø「いるはずの（はずだった）者」
jeŋa-jo-lqəl -Ø「飛ぶはずの（はずだった）者」
b. ʕajŋaw-jo-lqəl-Ø「呼ぶはずの（はずだった）対象」
təm-jo-lqəl-Ø「殺すはずの（はずだった）対象」

4.1.1.　格・数標示

上述のとおり，典型的な名詞は 11 種類の格標示を受け，数は絶対格において単数，双数，複数が区別されるが，JQ も名詞項となる際，格・数標示を受ける。(13a) (13b) は自動詞主語となった例，(14a) (14b) は他動詞目的語となった例であるが，いずれも，絶対格を取っており，(13a) (14a) は単数形，(13b) は複数形，(14b) は双数形である。また，(15) は JQ が場所格で用いられた例である。

(13) a. taŋataw-jo-lqəl-Ø　　jeppə　ku-jəlqet-ə-ŋ-Ø.
get.dressed-NML-to.be[6]-ABS.SG　yet　IPF-sleep-E-IPF-3SG.S
「服を着るはずの人はまだ寝ている」

b. jac-co-lqəl[7]-o　　ecɣi　ŋəlvəlʕ-ə-k　　təqən
come-NML-to.be-ABS.PL　now　reindeer.herd-E-LOC　likely
ko-qoja-ɣijke-la-ŋ-Ø.
IPF-reindeer-catch-PL-IPF-3S
「来るはずの人たちは，今，群れでトナカイを捕まえているようだ」

(14) a. ɣəmnan　təne-jo-lqəl-Ø　　t-ə-ntəmŋev-ə-n-Ø.
I(ERG)　sew-NML-to.be-ABS.SG　1SG.S-E-lose-E-3SG.O-PF
「私は縫うはずの物を失くしてしまった」

b. ənan　awja-jo-lqəl-te　　ku-ʕejŋəw-ŋ-ə-ni-n.
he/she(ERG)　eat-NML-to.be-ABS.DU　IPF-call-IPF-E-3SG.S-3DU.O
「彼は食べるはずの（2 人の）人を呼んでいる」

(15)　jeŋa-jo-lqəl-ə-k　　mitiw　ɣe-minnine-te.
fly-NML-to.be-E-LOC　tomorrow　IMPR-join-IMPR
「明日，飛ぶはずの人に加わりなさい」

しかし，JQ の格標示には制限がある。筆者の調査では，JQ は絶対格，場所格以外の格は取れない。たとえば，(16) のように道具格（＝能格）を取ることはできない。

(16)　*jeŋa-jo-lqəl-a　　na-k-enajej-ɣe.
fly-NML-to.be-INSTR(ERG)　INV-IPF-look.for-2SG.O
「飛ぶはずの人があなたを探している」

jeŋa-jo-lqəl-Ø の格標示を上の (2) で見た典型的な名詞語幹 jaja「家」と比べてみる (17)。

[6] 「(近い) 将来～になるべき人」の意味。通常は to-be と綴るが，形態素境界のハイフンと混同しないように，ここでは便宜的に to と be の間はピリオドにする。
[7] jac-colqəl は，基底形の **jet-jolqəl** の形態素境界の **t** と **j** が同化を起こしたもの。

(17) 典型的名詞語幹 mil'ut「ウサギ」と jeŋa「飛ぶ」の JQ 形の格変化

	mil'ut「ウサギ」	jeŋa「飛ぶ」
絶対格	mil'ut-Ø（単） mil'ut e-t（双） mi l'ute-w（複）	jeŋa-jo-lqəl-ø（単） jeŋa-jo-lqəl-te（双） jeŋa-jo-lqəl-o（複）
場所格	mil'ute-k	jeŋa-jo-lqəl-ə-k
道具格	mil'ute-te	―――
与格	mel'ota-ŋ	―――
方向格	mel'ota-jtəŋ	―――
沿格	mel'ota-jpəŋ	―――
奪格	mel'ota-ŋqo	―――
原因格	mil'ute-kjit	―――
様態格	mil'ute-nu	―――
接触格	mil'ute-jite	―――
共同格 I	ɣe-mil'ute-te	―――
共同核 II	ɣejq-ə-mil'ute-te	―――
随格	ɣa-mel'ota-ma	―――

JQ は，また，様々なタイプの修飾語を伴って，主要部名詞になることができる。筆者のこれまでの調査では，他動詞語幹から派生され，その目的語を表す JQ の場合には，(18) のように様々なタイプの修飾語を伴うことができる。(18a) は属性叙述の n-..-qin，(18b) (18c) は属格の -kin, -in による修飾語である。このうち，(18c) の mucɣ-in「私たちの」は「殺す」の主語が属格で現われたものである。

(18) a. n-ə-mejəŋ-qin-Ø təm-jo-lqəl-Ø「大きな殺すはずのもの（トナカイなど）」
b. ŋəlvəlʕ-ə-kin-Ø təm-jo-lqəl-Ø「群れの殺すはずのもの」
c. mucɣ-in-Ø təm-jo-lqəl-Ø「私たちの殺すはずのもの」

しかし，自動詞語幹から派生され主語を表す JQ は修飾語を伴うことができない。その場合には，主要部名詞を挿入し，名詞修飾句として用いなければ非文となる。このような修飾語の有無の偏りにはなんらかの理由があると予想されるが，今のところ明らかにできていない。(19a) は非文，(19b) は主要部名詞 ʕojacek-Ø「青年」を挿入し，JQ が名詞修飾語になることにより適格な句となった例である。

(19) a. *n-ə-tuj-qin-Ø jeŋa-jo-lqəl-Ø「若い飛ぶはずの人」
b. n-ə-tuj-qin-Ø ʕojacek-Ø jeŋa-jo-lqəl-Ø「飛ぶはずの若い青年」

一方，自動詞語幹から派生した JQ でも，次の (20) のように指示詞を属部に取った場合には適格文となる。

(20) q-ə-ʕejŋew-Ø　　ŋaje-n　　jeŋa-jo-lqəl-Ø.
2SG.S/IMPR-E-call-3SG.O　　that-ABS.SG　　fly-NML-to.be-ABS.SG.
「あの飛ぶはずの人を呼びなさい」

4.1.2.　名詞項と付加詞

JQ が単独で名詞項として用いられる場合，(21) で見るように，他動詞語幹の主語にあたる語は能格ではなく属格で現われる。このことは，(1) であげた Givón (2001:25) の指摘にある「主語 (and/or) 目的語の属格標示獲得」という形態的特徴とも合致する。一方，(22) で見るように，斜格名詞は定形動詞と同じように取ることができる。

(21) ɣəm-nin-Ø　　ʕajŋaw-jo-lqəl-Ø　　miŋkəje　amu
1SG-GEN-ABS.SG　　call-NML-to.be-ABS.SG　　where　probably
ɣe-lq-ə-lin.
RES-leave-E-RES+3SG.S
「私が呼ばなければならなかった人は，多分どこかに行ってしまった」

(22) magadan-etəŋ　　jeŋa-jo-lqəl-Ø　　jeppə　　ko-tva-ŋ-Ø
Magadan-ALL　　fly-NML-to.be-ABS.SG　　yet　　IPF-be-IPF-3SG.S
ŋəlvəlʕ-ə-k.
reindeer.herd-E-LOC
「マガダンに飛ぶはずの人は，まだ群れにいる」

ただし，時間副詞などは JQ とは共起しにくいようである (23)。

(23) *mitiw　　va-jo-lqəl-Ø　　jaja-k　　ecɣi　　ʕeqev-i-Ø
tomorrow　　be-NML-to.be-ABS.SG　　house-LOC　　now　　leave-PF-3SG.S
ŋəlvəlʕ-ə-k.
reindeer.herd-E-LOC
「明日家にいるはずの人は，今日，トナカイの群れに行ってしまった」

この場合には，主要部名詞を付加し，名詞修飾節にすると時間副詞との共起が許容される (24)。

(24) [mitiw　　va-jo-lqəl-Ø　　jaja-k]　　ʕojacek-Ø　　ecɣi
tomorrow　　be-NML-to.be-ABS.SG　　house-LOC　　man-ABS.SG　　now
ʕeqev-i-Ø　　ŋəlvəlʕ-ə-k.
leave-PF-3SG.S　　reindeer.herd-E-LOC
「明日家にいるはずの人は，今日，トナカイの群れに行ってしまった」

4.1.3. テンス・アスペクト・ムード

2.2. で見たように，定形動詞は未来／非未来というテンスと完了／不完了というアスペクトの組み合わせにより屈折するが，この場合の未来／非未来というのは，参照時点 (reference point) を現在とした絶対テンスにおけるそれである。一方，JQ は，参照時点がコンテクストによって決まる相対未来である。ただし，JQ では完了／不完了というアスペクトの区別は中和される[8]。

(25) jeŋa-jo-lqəl-Ø jeppə jaja-k ku-jəlqet-ə-ŋ-Ø.
fly-NML-to.be-ABS.SG yet house-LOC IPF-sleep-E-IPF-3SG.S
「飛ぶはずの／だった人はまだ家で寝ている」

(26) ɣəm-nin-Ø ʕajŋaw-jo-lqəl-Ø miŋkəje amu
1SG-GEN-ABS.SG call-NML-to.be-ABS.SG where probably
ɣe-lq-ə-lin.
RES-leave-E-RES+3SG.S
「私が呼ばなければならない／なかった人は，多分どこかに行ってしまった」(=21)

このように，定形動詞が現在を参照時点とする絶対テンスで現われるのに対し，非定形動詞がコンテクストによって参照時点が決まる相対テンスで現われるという事実は，類型論的にも一般化しうる可能性をもつ。ちなみに，Comrie (1985) は，英語で次の (27) のような分詞の相対テンスの例をあげており，さらに同様の例は他言語でも観察されるとしている。

(27) a. The passengers awaiting flight 26 proceeded to departure gate 5. (Comrie 1985:57)
b. The passengers awaiting flight 26 will proceed to gate 5. (Comrie 1985:59)

一方，定形動詞にはムードとして，直説法，命令法，反実仮想法があるが，名詞項としての JQ には，このようなムードの違いは標示されない。

4.2. 名詞修飾句・節としての JQ

JQ は上述のように名詞項としてだけではなく，名詞修飾句としても名詞修飾節の述部としても用いられる。名詞修飾句の場合には，JQ が単独で主要部名詞を修飾するが，名詞修飾節では，JQ 自体が節の述部として他の名詞項や付加詞を取り，主要部名詞を修飾する。ただし，句か節かの違いは主にこのように名詞項や付加詞を取るかどうかだけであり，両者には形態的・統語的にそれ以外の本質的違いは認められない。したがって，ここでは両者を区別して扱うことはしない（「関係節」の代わりに「名詞修飾節」と呼ぶのも，このような名詞修飾句との平行性を明確にするためである）。

[8] Comrie and Thompson (2007) では，名詞化してもテンスの区別が保持されるトルコ語や，アスペクトの区別が保持されるポーランド語の例が紹介されている。

4.2.1.　格・数標示

JQ が名詞修飾句・名詞修飾節の述部となる場合，自動詞語幹から派生されると主語，他動詞語幹から派生されると目的語がその主要部名詞となる。JQ はそれ以外の名詞項を主要部名詞として取ることはできない（呉人 2008, Kurebito 2008）。すなわち，JQ が取れる格は 4.1. で見た単独の名詞項として用いられる JQ よりもさらに制限され，絶対格のみである。例は次の 4.2.2. で合わせて示すことにする。

4.2.2.　取りうる名詞項と付加詞

次に取りうる名詞項と付加詞について見ると，名詞項の JQ と異なり，名詞項，すなわち他動詞主語は定形動詞同様の能格標示を受けることができること，付加詞としては斜格名詞だけでなく副詞も取りうること，さらに副動詞をともないうることなどが観察される。

まず自動詞語幹からなる JQ について見る。次の (28a) は自動詞語幹 ŋajqətva「掃除する」から派生された JQ 名詞句であるが，斜格名詞や副詞を取ることで，(28b) (28c) のような名詞修飾節に拡張される。例では下線部が主要部名詞，[　] で括った部分が名詞修飾節である。

(28a)　【名詞修飾句】
əccaj-Ø　[ŋajqətva-jo-lqəl-Ø]　pəce　ajm-e-Ø.
ant-ABS.SG　clean-NML-to.be-ABS.SG　first　go.to.fetch.water-PF-3SG.S
「掃除をするはずの叔母さんは，まず水汲みに行った」

(28b)　【名詞修飾節】
əccaj-Ø　[jaja-k　ŋajqətva-jo-lqəl-Ø]　pəce
ant-ABS.SG　house-LOC　clean-NML-to.be-ABS.SG　first
ajm-e-Ø.
go.to.fetch.water-PF-3SG.S
「家で掃除をするはずの叔母さんは，まず水汲みに行った」

(28c)　【名詞修飾節】
əccaj-Ø,　[ʕamin　ecɣi　jaja-k　ŋajqətva-jo-lqəl-Ø]
ant-ABS.SG　INTRJ　today　house-LOC　clean-NML-to.be-ABS.SG
pəce　ajm-e-Ø.
first　go.to.fetch.water-PF-3SG.S
「今日，家で掃除をするはずの叔母さんは，まず水汲みに行った」

さらに，自動詞語幹から形成された JQ が奪格名詞，共同格名詞，時間副詞を取っている次例 (29) も見られたい。

(29)　qajəkmiŋ-ə-n,　[ʕamin　mitiw　jamk-ə-ŋqo
boy-E-ABS.SG　INTRJ　tomorrow　neighboring.brigade-E-ABL

jac-co-lqəl-Ø ɣe-tumɣ-e]
come-NML-to.be-ABS.SG COM-friend-COM
ko-ncocmaw-ŋ-ə-ne-n ujetik-Ø.
IPF-prepare.for-IPF-E-3SG.S-3SG.O sledge-ABS.SG
「明日，隣のブリガードから友達と一緒に来るはずの少年は，橇を準備している」

次に，他動詞語幹から派生された名詞修飾句・節の JQ を見る。主要部名詞は，他動詞の目的語である。(30a) は名詞修飾句であるが，(30b) では，他動詞主語が能格で標示され，時間副詞 mitiw「明日」をともなって，名詞修飾節として拡張している。さらに，主要部名詞と名詞修飾節の間に，話者が聞き手にとってすでに既知である陳述内容を，聞き手に想起させる機能をもつ間投詞 ʕamin が挿入されることにも注意されたい[9]。

(30a) 【名詞修飾句】
kalikal [akmec-co-lqəl-Ø]
book(ABS.SG) buy-NML-to.be-ABS.SG
「買う予定の本」
(30b) 【名詞修飾節】
kalikal, [ʕamin ɣəmnan mitiw akmec-co-lqəl-Ø]
book(ABS.SG) INTRJ I(ERG) tomorrow buy-NML-to.be-ABS.SG
「私が明日買う予定の本」

次の (31) では，他動詞語幹から派生された JQ が，主語（能格），時間副詞，さらには副動詞とともに名詞修飾節をなしている。

(31) wala-Ø, [ʕamin mitiw ʕojacek-a java-jo-lqəl-Ø
knife-ABS.SG INTRJ tomorrow man-INSTR(ERG) use-NML-to.be-ABS.SG
qoja-nm-at-ə-k], qiŋən ɣa-ntəmŋaw-len-Ø.
reindeer-kill-AP-E-CONV likely RES-lose-RES+3SG.S-3SG.O

[9] ʕamin は，Moll (1960:27) では ʕamən で現われ，ロシア語では kak by「なんとかして，どうしたら」と訳されているが, その品詞性や具体的な意味・機能については必ずしも明らかではない。しかし，ʕamin はコリャーク語ではきわめて頻出度が高い。その機能のひとつとして，話者が聞き手にすでに既知である陳述内容を聞き手に想起させるというモーダルな意味の標示があげられる。日本語の間投詞「ほら」に訳すことができる。たとえば，次の会話例を見られたい。
A: unməkɣəcci ku-ɣətʕet-ə-ŋ-Ø.
very you(ABS.SG) IPF-be.hungry-E-IPF-2SG.S
「君はとてもお腹がすいているねえ」
B: məjew ʕamin unm-ə-jəqmitiw t-ewji-k-Ø.
because INTRJ very-E-in.the.morning 1SG.S-eat-1SG.S-PF
「なぜなら，ほら，朝早く食べたでしょ」

en’pici-te
father-INSTR(ERG)
「明日，牧夫がトナカイを殺す時に使うナイフはどうやら父が失くしたようだ」

ただし，次のように属格を取っている例も (32) に見るように，1 例だけであるが観察されており，名詞修飾句・名詞修飾節では他動詞主語の取る格には能格か属格かでゆれが見られることがうかがえる。このようなゆれの要因については今のところ明らかではないが，(32) では上例とは異なり，他動詞主語が文頭に属格形で現われていること，主要部名詞が名詞修飾節に後置されていることに注目しておきたい。

(32) [ɣəm-nin-Ø　təne-jo-lqəl-Ø]　icʔ-ə-n
1SG-GEN-ABS.SG　sew-NML-to.be-ABS.SG　fur.coat-E-ABS.SG
t-ə-ntəmŋev-ə-n-Ø.
1SG.S-E-lose-E-3SG.O-PF
「私の縫う予定の毛皮上着を私は失くしてしまった」

ところで，主節内での主要部名詞の統語的役割は JQ 名修飾句あるいは節の形成にはなんら影響を与えない。そのため，(33) (34) に見るように，主要部名詞と JQ は取る格が異なることもありうることに注意されたい[10]。

(33) qajəkmiŋ-a,　[ʕamin　mitiw　jac-co-lqəl-Ø],
boy-INSTR(ERG)　INTRJ　tomorrow　come-NML-to.be-ABS.SG
ko-ncocmaw-ŋ-ə-ne-n　ujetik-Ø.
IPF-prepare.for-IPF-E-3SG.S-3SG.O　sledge-ABS.SG
「明日来る予定の少年は，橇を用意している」

(34) q-ə-jəl-Ø　ɣə-nin-Ø　wala-Ø　ʕojacek-ə-ŋ,
2SG.S/IMPR-E-give-3SG.O　2SG-GEN-ABS.SG　knife-ABS.SG　man-E-DAT

[10] 一方，同系のチュクチ語では，後述する LH（チュクチ語では -lʔ）が主節内での主要部名詞の統語的役割に呼応して格変化する例が報告されている (Comrie 1981:110)。一般に主要部名詞の主節での統語的役割が関係節形成の可能性や使用される特定の関係節構造の違いに対して影響を与えないと言われていることを考えると (Comrie 1981:146)，チュクチ語のふるまいはむしろ特異である。(i)では主要部名詞が能格を取るのに呼応して，LH も能格で現われている。
(i) en-aɣtat-kə-lʔ-a　qaa-k　ʔaaćek-a　vinretərkəninet　ŋevəćqetti.
逆受動-追う-否定-分詞-能　トナカイ-処　若者-能　彼が-助ける-彼女たちを　女たち-絶
「トナカイを追わない若者は女たちを手助けしている」　(Comrie 1981:110)
次の (ii) では，主要部名詞の方向格に呼応して，LH 分詞も方向格を取っている。
(ii) iɣər　a-yoʔ-kə-lʔ-etə　enm-etə　mənəlqənmək.
今　否定-到達する-否定-分詞-向　山-向　させる-私たちに-行く
「さあ，（誰かが）到達しなかった山に行きましょう」　(Comrie 1981:110)

[ʕamin mitiw jac-co-lqəl-Ø ŋəlvəlʕ-ə-ŋqo].
INTRJ tomorrow come-NML-to.be-ABS.SG reindeer.herd-E-ABL
「明日，家畜トナカイの群れから来るはずの男にお前のナイフをやりなさい」

4.2.3. テンス・アスペクト・ムード

名詞修飾句・名詞修飾節の JQ も名詞項としての JQ 同様に，相対テンスをもつ。次の例 (35a) (35b) を見られたい。

(35) a. ʕojacek-Ø, [ʕamin mitiw jeŋa-jo-lqəl-Ø magadan-etəŋ]
man-ABS.SG INTRJ tomorrow fly-NML-to.be-ABS.SG Magadan-ALL
「明日，マガダンに飛ぶはずの男」
b. ʕojacek-Ø, [ʕamin ajɣəve jeŋa-jo-lqəl-Ø magadan-etəŋ]
man-ABS.SG INTRJ yesterday fly-NML-to.be-ABS.SG Magadan-ALL
「昨日，マガダンに飛ぶはずだった男」

一方，ムードの標示がおこなわれないことも，名詞項としての JQ と同様である。

4.3. 主節の述部としての JQ

以上の用法に加え，JQ は主節述部として現われ，「～しなければならない（～しなければならなかった)」というモーダルな意味を表わす。このような意味は，対応する定形動詞には認められないため，名詞化により遡及的に獲得された意味であると考えられる。この場合，JQ は，(3) でみた通常の名詞述語同様に，人称・数の標識をもつ。すなわち，自動詞ならば主語の，他動詞ならば目的語の人称・数を表わす接尾辞を伴う。(36) は JQ が述語（同格も同様）として用いられる場合の語形変化のパラダイムである。なお，動詞語幹は va「いる」という自動詞である。

(36) va「いる」から派生した JQ 述語のパラダイム

1 単主	va-jolqəl-iɣəm	「私はいなければならない」
1 双主	va-jolqəl-muji	「私達 2 人はいなければならない」
1 複主	va-jolqəl-muju	「私達はいなければならない」
2 単主	va-jolqəl-iɣi	「貴方はいなければならない」
2 双主	va-jolqəl-tuji	「貴方達 2 人はいなければならない」
2 複主	va-jolqəl –muju	「貴方達はいなければならない」
3 単主	va-jolqəl-Ø	「彼はいなければならない」
3 双主	va-jolqəl-te	「彼ら 2 人はいなければならない」
3 複主	va-jolqəl-o	「彼らはいなければならない」

すなわち，このような JQ の主節述語としての用法は，奇妙な言い方ではあるが，JQ が名詞化により，名詞的な意味ではなく，動詞的な意味を獲得していることを示していると考

えられる。このことで想起されるのが，日本語の「男ならそんな馬鹿なことはしないものだ」「明日は家で彼女の帰りを待つことだ」のように，「もの」「こと」などが形式名詞として一種のモーダルな意味をもつ，いわゆる「体言締め文」である（角田 1996）。ただし，これについての詳細は第 5 節にゆずる。

4.3.1.　格・数標示

JQ が主節述語となる場合には，当然，格標示は受けない。

4.3.2.　取りうる名詞項や付加詞

一方，名詞項や付加詞は定形動詞同様の形式で取ることができる。すなわち，他動詞主語は能格で現われ，上述の名詞修飾句・名詞修飾節のような属格と能格との間のゆれは観察されない。また，斜格名詞だけでなく，時間副詞などとも共起できる。

次の (37a) (37b) は自動詞語幹からなる JQ 述語，(38a) (38b) は他動詞語幹からなる JQ 述語の例である。

(37) a. ɣəcci ecɣi va-jo-lqəl-eɣe ɣ-en’pici-te jaja-k.
you(ABS.SG) today be-NML-to.be-2SG.S COM-father-COM house-LOC
「あなたは今日，父と家にいなければならない」

b. əccu awje-jo-lqəl-o awje-ja-k.
they(ABS) eat-NML-to.be-3PL.S eat-house-LOC
「彼らは食堂で食べなければならない」

(38) a. ɣəmnan inʕe ʕajŋaw-jo-lqəl-Ø qajəkmiŋ-ə-n.
I(ERG) soon call-NML-to.be-3SG.O boy-E-ABS.SG
「私は少年をすぐに呼ばなければならない」

b. mitiw ɣənan ŋəlvəlʕ-ə-ŋqo jəle-jo-lqəl-Ø
tomorrow you(SG.ERG) reindeer.herd-E-ABL bring-NML-to.be-3SG.O
təm-jo-n.
kill-NML-ABS.SG
「お前は明日，群れから殺したトナカイを持ってこなければならない」

4.3.3.　テンス・アスペクト・ムード

テンスは，名詞項，名詞修飾句・節同様に相対テンスであり，時間副詞により参照時点が現在にも過去にもなりうる。次の (39a) は現在が参照時点，(39b) は過去が参照時点になっている例である。

(39) a. ɣəmmo mitiw an’pec-ə-ŋ ŋəlvəlʕ-ə-k
I(ABS) tomorrow father-E-DAT reindeer.herd-E-LOC
wenn’a-co-lqəl-eɣəm.
help-NML-to.be-1SG.S

「私は明日トナカイの群れで父の手伝いをしなければならない」

b. ənno ajɣəve janot qoja-nm-ac-co-lqəl-Ø[11].

he/she(ABS) yesterday first reindeer-kill-AP-NML-to.be-3SG.S

「彼は昨日，まずトナカイを殺さなければならなかった」

これに対して，アスペクトやムードのカテゴリーの明確な標示はない。ただし，先にも述べたように，意味的には「〜しなければならない」というモーダルな意味を担っている。

4.4. 名詞化の階層性

以上，JQ の名詞化の度合いを，名詞項，名詞修飾句，名詞修飾節の述部，主節の述部のように文中での文法的役割に分けて検討してみた。その結果，次のことが明らかになった。

(40) a. 名詞化の度合いは JQ の文中での文法的役割により階層をなしている。すなわち，格標示，名詞項・付加詞の取り方，テンス・アスペクト・ムードの現われと言う 3 つの点に照らしてみると，名詞項＞名詞修飾句・名詞修飾節＞主節述部の順に名詞化の度合いが低くなる。

b. ただし，名詞化の度合いが最も高い名詞項としての JQ も，格標示に制限があり，典型的な名詞としての形態的資格を獲得しているわけではない。

c. 一方，名詞化の度合いの最も低い主節述語としての JQ は，大きく次のような点で，意味的，統語的により動詞に近い性質を帯びている。

i) 名詞項（他動詞主語）を定形動詞と同じように能格で取る。

ii) 斜格名詞や副詞などの付加詞を定形動詞と同じように取る。

iii) 義務というモーダルな意味をもつ。

(41) は，以上の結果を簡略的に図示したものである。

(41) JQ の名詞化の度合いと形態・統語・意味特徴の相関性

名詞化 高 ◀——▶ 低	名詞項 ＞	名詞修飾句・名詞修飾節 ＞	主節述部
格・数標示：	絶対格／場所格	絶対格	×
他動詞主語：	属格	属格／能格	能格
TA：	相対テンス	相対テンス	相対テンス
モーダル：	×	×	義務

5. JQ 述語と日本語の体言締め文との類似性

すでに言及したように，日本語には，＜動詞／形容詞の連体形＋体言＋だ＞の構造をもつ「体言締め文」と呼ばれる文がある（角田 1996）。このような文の体言の位置で用いら

[11] nm「殺す」という他動詞語幹からなるにもかかわらず，主語が絶対格で現われているのは，JQ の動詞語幹が逆受動化しているためである（JQ 主節述語において qoja「トナカイ」が nm「殺す」に抱合され，逆受動接尾辞 -ac が接続していることに注意されたい）。

れる名詞には，普通の名詞 (42)，形式名詞 (43)，ノ (44) がある（例は角田 1996 より）。

(42) a. 政府は米の輸入を認める意向だ。
b. 政府は明日，野党と話し合う段取り／運びだ。
c. 工場で大きな事故が続いている模様だ。
d. 日本人は正月と盆を祝う習わし／習慣です。
e. 花子は結局失敗する運命だった。
(43) a. 太郎は明日東京へ行くつもりだ。
b. 太郎は，明日東京へいくはずだ。
c. 男の子は泣かないものだ。
d. 太郎は今本を読んでいるところだ。
(44)　学生が一所懸命勉強している。試験があるのだ。

角田 (1996) は，体言締め文の文末部の形態的・統語的ふるまいを南 (1974) の提案する A 類から D 類までの節の分類にもとづき，連体節を含む名詞文，時やヨウ従属節，体言締め文，ヨウ・フウ主節，動詞／形容詞文と比較している。それによれば，これらの文は連続帯をなしてつながっている。すなわち，特に統語的にみると，この順に名詞的特徴を失い，動詞文，形容詞文の特徴が増えてくるという。

さらに角田 (1996) では，体言締め文は文末部の特徴に関しては連体節を含む名詞文に似ているが，他の部分の統語的特徴の面では，反対に動詞／形容詞文と同じであるという特徴を示すことが指摘されている。このように名詞とも動詞とも共通する特徴を持つ体言締め文は，コリャーク語の主節に現われる JQ 述語の統語的・意味的特徴とも共通するところがあると考えられる。

この問題については，改めて別稿で詳しく論じたいと考えるが，ここでごく簡略的に，体言締め文と JQ 主節述語の相違点 (45) と類似点 (46) をまとめておく。

(45) 【相違点】
a.　体言締め文は＜動詞／形容詞の連体形＋体言＋だ＞という統語的な構造をもつのに対して, JQ 主節述語は＜動詞語幹＋名詞化接辞＞といういわば統辞的な構造をもつ。JQ は日本語の「だけ」「ばかり」のように，語源的には自立名詞であったものが接尾辞化した (Tsunoda 2010) とは考えにくく，本来，接尾辞であったものと考えるべきである。このような現われの違いは，第 3 節でも述べたように，コリャーク語が複統合的な言語であり，通常は自立語で表わしうるような意味・機能が接辞で表わせることが多いこととも無関係ではないかもしれない。
b.　体言締め文では普通名詞，形式名詞，「ノ」など多様な体言が用いられているが，コリャーク語では JQ 以外に名詞化接辞は上述の GN，JO，LH があるだけであり，使用が制限されている。
(46)【類似点】
a.　両者はいずれも，名詞と動詞の中間的な特徴を示す点で類似している。具体的に

は，次のとおりである。

a-1. 統語的に類似点を示す。一例をあげれば，体言締め文では，連体節や時やヨウの従属節と異なり，主語は通常の定形動詞同様ガで表わされ，ノに交替できない（「太郎が／*の勉強している模様だ」など)。同様に，JQ 主節述語でも，主語は定形動詞同様，能格で表わされ，属格では現われない（例 38 参照)。

a-2. 意味的に類似点を示す。体言締め文のなかにも，義務などのモーダルな意味を表わすもの（「男の子は泣かないものだ」など）があり，JQ 主節述語が同様に義務の意味を表わすことと類似性を示す。

以上の事実は，体言締め文の通言語的研究は，その構造が統語的に現われているか，統辞的に現われているかの違いを超えて進めうるべきテーマであることを示唆していると考えられる。

6. おわりに

以上，本稿では，コリャーク語の名詞化について，動作主・被動作主を表わす JQ という形式について考察を加えた。考察の結果は上に述べたとおりであるが，ここでは本稿の考察を今後どのように展開させるべきかを押さえておきたい。具体的には，大きく次の 2 点を考えている。

A. コリャーク語のその他の名詞化接辞，すなわち，動作名詞を形成する形式 (GN) ならびに JO,LH についても JQ 同様, 名詞化の度合いを検証し, これら 4 つの形式を形態的・統語的・意味的な観点から比較考察する。
B. A の結果を踏まえ，より総合的に体言締め文とコリャーク語の名詞化を比較検討する。

本稿では，コリャーク語の名詞化に関する研究をこのような 2 つの方向に展開していくために，まずは考察の枠組みと方法について JQ を対象に整理し示した次第である。

略語・略号表

ABL=ablative	ABS=absolutive	ALL=allative	ANM=animate
AP=antipassive	CAUS=causative	COM=comitative	CONV=converb
DAT=dative	DU=dual	E=epenthesis	ERG=ergative
FUT=future	GEN=genitive	HABIT=habitual	IMPR=imperative
INH=inchoative	INSTR=instrumental	INT=intensive	INTRJ=interjection
INV=inverse	IPF=imperfective	LOC=locative	NML=nominalizer
O=object	PF=perfective	PL=plural	RES=resultative
S=subject	SG=singular	1=first person	2=second person
3=third person			

参考文献

Bhat, D.C.Shankara (1994) *The Adjective Category.* Amsterdam: John Benjamins.

Chomsky, N. (1970) Remarks on Nominalizations. In R.A.Jacobs and P.S.Rosenbaum (eds.) *Readings in English Transformational Grammar.* Washington, D.C.: Georgetown University Press.

Comrie, B. (1976) The Syntax of Action Nominals: A Cross-Linguistic Study. *Lingua* 40:177-201.

Comrie, B. (1981) *Language Universals and Linguistic typology*. Oxford: Basil Blackwell.

Comrie, B. (1985) *Tense.* Cambridge: Cambridge University Press.

Comrie, B. and S. A.Thompson, (1985) Lexical Nominalization. In T.Shopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description. Vol. Ⅲ*, 349-398. Cambridge: Cambridge University Press.

Croft, W. (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information*. Chicago: University of Chicago Press.

Givón, T. (1990) *Syntax. Vol. Ⅱ*. Amsterdam: John Benjamins.

Givón, T. (2001) *Syntax: an introduction Vol. I.* Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Hopper, P. and S. A.Thmposon (1984) The Discourse Basis for Lexical Categories in Universal Grammar. *Language* 60: 703-752.

Keenan, E. L. and B. Comrie (1977) Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar. *Linguistic Inquiry* 8-1: 63-99.

Koptjevskaja-Tamm, M. (1993) *Nominalization.* London: Routledge.

呉人　惠 (2002)「コリャーク語の名詞句階層と格・数標示」『アジア・アフリカ言語文化研究』62: 107-125.

呉人　惠 (2008)「分詞および関係詞によるコリャーク語関係節の相補的形成」『北方人文研究』1: 19-41.

Kurebito, M. (2008)　Participial Relative Clauses in Koryak and their Typological Characterization. *Linguistic Typology of the North* 1: 29-42.

Lees, R.B. (1960) *The Grammar of English Nominalizations.* The Hague: Mouton.

Lehmann, C. (1988) Towards a Typology of Clause Linkage. In J. Haiman and S. A. Thompson (eds.) *Clause Combining in Grammar and Discourse,* 181-225. Amsterdam: John Benjamins.

Malchukov, A. (2005) Remarks on deverbalization. *Sprachtypologie und Universalienforschung*, 58:97-110.

南不二男 (1974)『現代日本語の構造』（大修館書店）

Moll, T. A.(1960) *Korjako-russkij slovar'.* Leningrad: Gosdarstvennoe uchebno-pedagogicheskoe izdatel'stvo.

Nikolaeva, I. (2007) *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations* (second edition). Oxford: Oxford Universtity Press.

Noonan, M. (1985) Complementation. In T. Shopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description. Vol. Ⅱ, Complex Constructions,* 42-141. Cambridge: Cambridge University Press.

角田太作 (1996)「体言締め文」『日本語文法の諸問題』139-161. 東京：ひつじ書房.

Tsunoda, T. (2010) Mermaid Construction: Introduction, with Illustrations from Japanese. Paper Distributed at the Meeting on 'Adnominal Clause and Noun-concluding construction: Grammaticalization of the Noun'. 11 December 2010, National Institute for Japanese Language and Linguistics.

Zhukova, A. N. (1972) *Grammatika korjakskogo jazyka.* Leningrad: Izdatel'stvo Nauka.

Nominalization of Koryak: Meaning and Syntax of Agent Nominals and Patient Nominals

Megumi KUREBITO
(University of Toyama)

The present paper aims to examine one of the nominalization phenomena of Koryak (the Chukchi-Kamchatkan language family)—agent nominals and patient nominals derived from intransitive or transitive verbs through suffixation of *-j-olqəl* (JQ hereafter). In particular, this paper aims to ascertain the followings:

(a) There is a hierarchy of the degree of JQ nominalization according to grammatical functions in sentences. That is, the degree of nominalization decreases in the following order: nominal argument > noun modifying phrase/clause > predicate of the main clause.
(b) Even the nominal argument in the highest hierarchy exhibits limited case marking and thus does not obtain the same morphological and syntactic properties as a prototypical noun.
(c) Predicative JQ in the lowest hierarchy of the degree of nominalization obtains certain verbal meaning and syntax in the following phenomena:
    i) Similar to a finite verb, it takes a nominal argument, that is, transitive subject, in the absolutive case.
    ii) Similar to a finite verb, it takes oblique cases and adverbs.
    iii) It obtains a modal meaning of obligation.

Through the analysis of JQ, this paper also reveals that predicative JQ exhibits both syntactic and semantic similarity to the "noun-concluding sentence" found in a number of languages, including Japanese. This suggests that a cross-linguistic study of noun-concluding sentences is possible not only from those data of languages with syntactic noun-concluding sentences but also from that of some other languages with morphological noun-concluding sentences.

（くれびと・めぐみ　kurebito@hmt.u-toyama.ac.jp）